

昭和十四年二月号

65

學校日誌

一月一日
一月九日
一月十五日

四方拜合時十分學式 十時新年奉祝式 全校參加
午前七時 應召者上村長治准尉又波止場マテ見送ル
書初 履見覽會 高等科児童
林業指導者ヲ校ニ爲ノ眞岡校長王野教員引 齊學田ニ赴ク
八時 管林署長 関根署員同行
午後一時 入營会 波止場マテ見送ル
植林ノ夕 學校地ニ全校遠足
高等科児童 午前神社境内ノマテ 遊見植林
午後三時 以上ノ神社 女ノ墓地ノ掃除ヲ奉仕ス
午後一時 鹿島 長永昇氏 英靈ニ對シ全校教員 意ヲ捧ル代表者
燒香ス

一月二十日
一月二十一日
一月三十一日
二月八日
二月九日

午後四時 富永一氏ノ入營ヲ送ル
午前八時三十分 昭和十三年送別競技會ヲ實施(本運動會ヲ併セ)
午前八時 紀元節式舉行 吟九時 建國祭ニ參列
午後 高等科 児童 釣魚 肥料運搬奉仕
午後四時 佐々木四郎入營ニ波止場マテ見送ル
午前十一時 昭和九年組出征兵山本健司氏ヲ波止場マテ見送ル

二月十日
二月十一日
二月十七日
二月十五日

...

ジン一 ツヅリカタ

◎ ドウブツエン

ヨコヤマヨシマサ



ボクハトウチン トフネニ
ノツテ東京ニイキ
マシタ。 アンドンハシツテ東京ニツクト
アンチンガムカヘニ來テキマシタ。 フネ
カラオリテジドウシヤニノリマシタ。 青川
サンノウチニトマツテソノアシタ トウチヤ
ンニドブツエンニツレテテモラヒマシタ
ジドウシヤニノツテイトドウブツエンニツ
キマシタ。 ハジメニクジヤクヲ見マシタ
ソノツギニサウヲ見マシタ。 ボクガシヤ
ヲヤルトハナテカラシテロニ入レテハ
タ。 ソノツギニキリンヲ見マシタ。 赤クハ
アキタノデジドウシヤニ入レテハ
ウチニカヘリマシタ。

◎ ドウブツエン

ナガタ シウゴ

ボクガ六ツノ時 オバアキヤントオナカニイキマ
シタ。 オナカニイク前ニトウキヤニイキマシ
タ。 オバアキヤンニ 「ドウブツエンニツレテ
ツテ」 トクノムト 「ヨシヨシツレテツレテヤル
ヨ」 トイヒマシタ。 ボクハウレシクテオマリ
マセン。 「オバアキヤン 早くツレテツレトイ
フト」 「マツテオナカイ。 イマシタラシテオハ
ンダ」 トイヒマシタ。 シタクガデキルトオハ
アキヤント トシ子オエキヤント三人テドウブ
ツエンニイキマシタ。
ジドウシヤニノツテイトウチニトウブツエン
ツエンニツキマシタ。 ハジメニサウヲ見マシタ
ボクガオバアキヤンヲ見マシタ。 ソレカラオバ
アキヤン 「オナカニ入レマシタ。 ソレカラオバ
アキヤンカバカキオナカニ入レマシタ。 ト
シ子オエキヤンガキヤラオナカニ入レマシタ。 カ
スルトカバノ口ニオナカニ入レマシタ。 コンドハ
バハカニ中ヘムクツテシマヒマシタ。 コンドハ
アキヤンヲ見ニイカワトオナカニ入レマシタ。

シタ。トシ子ネキヤンハジドウシヤヲヨビ
ニイキマシタ。ジドウシヤガ来ラノデミン
ナムリシタ。ボクハフジドウシヤハ早イバ
トネヒマシタ。ボクハハバウチニホムツテシ
マヒタシタ。目ガサマルトモウチノ
キマシタ。ボクガ衣ヒテキヤンニ
ニイツイタハバシラシクアケルト
ヤンイオトワサシカキオカライイヨ
ドボクニテサキイケル。シヤウ
タダキヤシタ。ボクハアケルツ
ンデシタ。

◎クダラ

シヤウ。カバエ
クダラボノキキガボウトナリマシタ。
イソイデキヤシニイキマシタ。キヨセデハ
モウ、ケンブツ人ガ火セイ見テキマシタ。
私がスミノ上デ見てキルト火キヤクデラガ
キカイデ、ガカラトヒキアケラレテ来マシ
タ。マン中マデヒイテ来ルトオトノ人ガク
デラヨクセイデキリマシタ。見テキルトキ
キルキガフルツサツハバウチノ
◎學校ゴッコ
カノウ ミエ子
私ハレイ子キヤントアツ子キヤント
シマシタ。ボクガキヤンセイトリマシタ。私
「アツ子キヤンガ、ケクシカキオカライイヨ」
「レイ子キヤンガ、ケクシカキオカライイヨ」
トイヒマシタ。私が「ソレキヤン、トクキヤン
シヤイ、トイヒマシタ。ラクリハキヤン出シマ
シタ。私が「キヤンアケルキヤン、トイヒマシタ
アツ子キヤン、レイ子キヤンガ、キヤンアケルシタ。
私が「ボクヨメル、トイヒマシタ。フタリガ
キヤンアケルシタ。私が「アツ子キヤン、本キヤ
ンキヤン、トイヒマシタ。アツ子キヤンガ、キ
ヤンアケルシタ。私が「ボクヨメルシタ、トイ
ヒマシタ。カネガキヤン、外へ出テア
ビマシタ。



ついでに

諸田正子

私が朝 寒ヤウなかつコウをして、タマナ
の木の下で、どりの鳥を捉って取る時、タマ
ナのみがあたまの上をコウんと落ちま
した。私はびくくりしてとび上りました。も
しこれがぼくだんだったら私はけむのや
うになつて空へとんでいったでせう。でも
んわの兵たいまんがしなをおへつけよう
下ナるので私はあんなしくいへんきやうして
おれずす。

田村田村の時

貴松信幸

田村田村の時、ぼくはうれしくなつた
イリませんでした。朝學校を出る時、た
いたスカウトを出してたへました。その時
スカウトの中にごむはじまはいつたね

ました。ぼくはごむはじまを、木の上
入れておきました。そして、ぼくはな
んなとつじよにあそびました
あそんでゐる時、東の方の空を見る
とまっくらでした。が、ぼくは、雨の
ふつて来たウキの、あんなな遠く道
をかへられなかつと、思ひました。
品おべんた
石田悦子

「あそんでゐる時、東の方の空を見る
とまっくらでした。が、ぼくは、雨の
ふつて来たウキの、あんなな遠く道
をかへられなかつと、思ひました。」
私「あそんでゐる時、東の方の空を見る
とまっくらでした。が、ぼくは、雨の
ふつて来たウキの、あんなな遠く道
をかへられなかつと、思ひました。」
先生「あそんでゐる時、東の方の空を見る
とまっくらでした。が、ぼくは、雨の
ふつて来たウキの、あんなな遠く道
をかへられなかつと、思ひました。」
先生「あそんでゐる時、東の方の空を見る
とまっくらでした。が、ぼくは、雨の
ふつて来たウキの、あんなな遠く道
をかへられなかつと、思ひました。」

あゝこく六人娘を歌ひながらかへった
川崎 米子

△思ひ出
私ね小ざい時、あきをはまだ一つでいた。
おのあやんがあきををしやうじのとこへ
おかしてあた、こをしめてしまつてあきをを
をだつとしてお便に行かうとしてだつこ
したう、あきををはいきをしないでおまし
た。私か

「おのあやんあきををはしんた」といひま
したう、おのあやんはまへかほきし
「おのあやんとおぢちゃんを呼んでおど
とおつしやつたのでおぢちゃんの家へ行つ
て「おぢちゃん大へんだよ」といふとニ
人ともびつくりして、私には何もまきか
いで家へかけて行きました。おのあやんに
どうしたの」ときくと「あきををがしんで
しまつた」といひましたので大さわがを
しました。とほりのおぢちゃんたちも

どうしたの、とききました。そのうち
おとうさんがしごとからかへてきま
したので私が「おとうさんあきををが
しんだよ」といふと、おとうさんは
くりにしたのをぬいであきををのこ
りへ行つてなきました。うわの人はみ
んなな、おなました。おなまは
三月三日でした。今でもあきををのし
んどときのことには忘れられません。

ほくのうらちにひよこがうまれに時、あ
まりかはい、ので、じかとしかられま
すがやめられな、でかはい、てびよこを
みるのが何よりのしみでした。少し大きくな
つたある日、急に大雨が降つてきたのでおぢ
さんが駕籠へかばを掛けて来ておぢ間に木
が出て五羽をほれしんで、のこりの木羽
も死にそうでした。が火であた、わたので助
かりました。が死んだひよこが今でもかほ
いさう、けりませ

尋三 續方

此頃

このころは大分天気が悪くて雨が降ります。
時々晴の目があります。けつはせつぶんです
が天気がよくなると思ひます。
このあひだ登山へ遠足に行きました。歸ると
ちやう雨が降つてびしぬれになりました。

こんなうらに雨が降つて、おのあやんはよく出
来ます。道がわるくなるので、人が困ります。
昨日おのあやんが降つて困りました。
今晩は雨が降るなげば、おのあやんも困ります。
すがまたどうだかわかりません。
今日はおのあやんが降つて困ります。
三學は、おのあやんが降つて困ります。
い勉強してゆうとうを取つと思ひます。

お正月

小柳よね子

いつもお正月ならば今年よりもうとめたい

此頃

小祝みづ子

此頃は火入さむい下す
ようさばくもたり又晴水たり、雨が
降つたりします。寒いは朝晩です。
なかなみも風が下りてみんな落ちて
しまします。葉は青々としておます。
此頃は晴れておのあやんが風が下り、
朝はくつしたまは、でもまださむい
下す。

朝

奥山みや

私は朝のほろあつてふとんをたたくのでから
けをば、たりやうきんがけましたり

慰問袋

小祝 保子と

勇ましく送り水て行く兵隊さん私達

家へ歸るとます子おはさんが一生懸命慰問袋をつくつておた。私も手つたつた。

の爲に幸甚して下さる兵隊さんは今日

幸恵姉さんは机に向つて手紙を書いておる。するとまさ子おはさんが「保子

の船で戦地へ行くのです。私達は旗を携

お前のお人形をもつておいで」といったの

が上りました。其の中にいろくどお話

で私は持つて来て箱に入れ姉さんの手

生懸命はたらくて」といふ言葉がはいり

紙に「二のお人形を支那の子供にやつて

ます。其の時に私は

下さい」と書いてもらった。

「あ、兵隊さんはあんなに命を捨て、ま

みつ豆を入水お人形を入れ葉書と半

で一生けんめいに國の爲、君の爲に戦つても

紙うなぎのかばやきようじ本、キヤラ

りなのは私達はのんきに豊かに通學し

メルスルメと入れました。

しておられる。これも皆兵隊さんのお

皆で「兵隊さんが喜びがよ」と言つて、

がけだ。」

きうくづめにしていれました。

と、思つてほんたうにすまないと思つた。

慰問袋をつつたあとは「氣もちが

旗はひらくと氣持よくひるがへつてゐる。

さつぱりしてとてもうれしかつた。

「萬ざい」といふ言葉を

「兵隊さんの見送り 神山子と

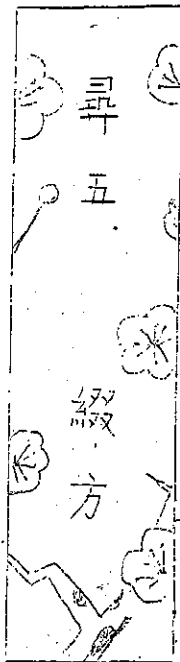
私たち國民は眞心をこめ

「天に代りて不義をうつ 忠勇む

出征入營兵士の御家族をいたはつ

さうの我が兵は」

て上げませう。」



節分

浅沼信行

あたりがやみに包まれて行くにつれてあら

こちらから「福は内へ鬼は外」と言ふ聲がと

こからともなく流れて来る。おうちでもそろ

と「まくら」と父が言った。僕は神棚の豆

を下して「福は内へ鬼は外」と聲をけり上げ

てまいた。もう鬼は逃げたのであらうあたりは

ひつそりとしづまつてゐる。急いで雨戸をひた

り、と開らして安心して自分の手にけ食へ

たから影に「影い」とと聞くとかは、手で

親ゆびと人さしゆびに中ゆびをささぐと出し

朝はなんとなく心がおちついでおて氣持がよ

い。僕は美しい朝の景色にみとれてゐると山

の方でとんとんとんとんとんと」といふこ

の音がした。あ、今日ほ十五日であると思つ

て心の中で手を合せて。木々もいつそりとし

て身動き一つしない。雨はしとくと降りつ

けてゐる。家々の屋根はみちしつとりとぬ

れ、雨はれさへたれてゐる。早い所ではもう

下水の掃除をしてゐる。僕は付のさかえへ行

くのも皆この下水掃除のためだと思つてい

までもつやくやくに祈つた。自動車は勢よく

走つてゐる。雨はやんご朝日は上つた。あた

武夜

鷲澤くみ

「武夜のことです。私が大聲で「國を出てか

ら我を」と歌つてゐますと、「電報」と郵便

がさんかガラス戸をあけたと思つたらもう行

つてしまつた。父ちやんとこから」と言ふと

朝の景色

羽鳥崇元

つてしまつた。父ちやんとこから」と言ふと

お父さんは心配さうに頭をかたむけて居た。しばらくすると「の船が東京へ行かなければならぬ」とおつしやつた。私が「どうしてなの」と言ふと「おばあさんが病氣でこの船で来なさいといふからちよつと行つてくる」といつて床の間に入つたと思ふと「ちよつとそこまで行つてくる」と言つてカラ／＼とカラス戸をあけて行つてしまつた。この夜ほど心配の夜はなかつた。

● おつかへ 山下 智子

もう一月程前のことです。私か今日は園画があるのよふにびいさんで學校へ行くともう一つのよろこびが私をまつてゐた。それは私が前からかつかへてほしいと思つておつかへた。私は飛立つ思ひかばんをおいた。私はあきらむんの前だつた。かよふさんと並ぶのだ。ところが目耳などの悪い人が居たので始三番だつたのが五番目になつた。私は今さういふ人と一しよに仲よく勉強してゐる。時々前に並んでゐる。よよさんの事を思ひ出すこともあつた。やつぱり

けんくわはしてお母の好い及だちは何のかわいものだ。

● 競技會 山下 璋

二月十日は競技會でした。五年以上は在校生の方でした。私達はかうえんをするための日の丸の旗をもつて學校へ行きました。私達もかけこをするといふので私は下にかゝる服をきて行きました。在校生の方が負けぬのであるだけの聲をほり上げて「ほーらほーら」かりとおうえんをこました。だけれども在校生の方は負けをばうかりです。りしりの時在校生の男生が勝つたので旗ふりの人がぼんざい／＼と旗をふつてゐるので私もうれしくなつて大きな聲で叫びました。いよいよ私たちのかけこにはなりました。藤川先生が「ドン」と鳴らしたのがびつくりしてかけ出しました。私の後からたれかめかうとしたのざい／＼でかけました。そしてほうびをもらつて自分のせまへかへりました。

第六の綴方

○ 遠足 藤瀧 静子

はあ／＼息を切りしまたか／＼と山道を上つて行つた。しばらく行くと畠のやうな所へついた。私は「おれが學田存のか知らう」と思つてふと見ると黄色の菜の花が涼しい風にゆらく動いてゐる。又とうなすもうさであつた。皆は「体がこが學田存のだらう」と六つてゐる。私も早くつけばいいねえと思ひながら行くと誰かがもうぎきつくま／＼と前の方で呼んでゐる。私はをどる心を押へ急ぎ足に歩いた。しばらく行くと向いの小高い松林の下に高等二年の男女や一年の女の子等が見えた。皆はキヤラメルを食べながらうら／＼さうに腰を下してゐる。私は後の子に「ついたよ／＼」と喜びの聲を上げた。そこは少し坂だつた。皆はうれし／＼さうにかけ上つて行つた。私は「ついたよ／＼」と腰を下した。

皆まはりにかたまつて坐つた。下を見下すと一面の草原ではあるが甘藷の畑のものがたくさんあつて遊ばぬには何となく不安である。誰か「キヤラメルを食べやう」と云つたので皆キヤラメルの小たをあげた。何とおいしかつた事でせう。かうしてしばらく休んでゐると永田先生が「おれが」をなうして大なる聲で「もうお晝にしましよ」といふのでおち／＼おち／＼と「おれが」と言つて早速べんしやつた。男の子が「おれが」と言つて早速べんたうの小たを開けた。おれがもかよふこびで包をといた。腹は空さつた。どん／＼においし／＼喜んだと思ふ。口には一ぱいづきかたて来た。のりの香／＼と鼻へ来る。一つ取つて一口食べた時のおいしさはどうなごちやうにもま／＼とやうがあまりせん。あんまりおいし／＼ので二つともみ／＼食べてしまつた。後の人が私達の方を見下してゐたので三四ちやんが「あんまり見下すなよ」と言ふとおれは「おれが」と云つた。皆は食べ終ると紙くづき片附けた。ふと見ると下の方で五年の女

生等が男の子の帽子をかぶつて、戦争につこま
てゐた。私たちもそれに従つて、戦争につこま
するこゝろになつた。二人づつ、やんけんをして
負けた方は支那軍となつた。私も支那軍だつた。
和子ちゃんも正ちゃんも支那軍だつた。支那軍は
洋服を反對に着た。みんなかあれあれと私達
まざして笑つてゐた。日本は向いの木影に集
り支那はさうきびの所に集つた。大將の正ち
やんが大きな聲で進めと命令をしたので、私と
サヨちゃんも真先にかけ出した。すると向い
草むらから攻めよせて来た日本軍と坂の所でぶ
つかつた。私は勉ちゃんに足にからみついて勉
ちゃんと一緒に草の中にころけ落ちた。めい
めい組合つて草の中をころげまはつてゐた。
その内に笛が鳴つた。もう歸るのかと惜しく思
つたり一二年だけ先にかへつて行つた。それか
り又三三回してゐたら、五六年集まれの号令が
かつたので仕方なく止めて歸る仕度をした。
もつと時間があつたりまだく面白くあそべた
のにも思ひながら歸途についた。

○ 順子ちゃん 雨宮美恵
今日は嬉しい、豆まきだ。朝起きてすぐあ
今日は豆まきだつて思つた。そして第一番
に考へたのは順子ちゃんの事だつた。一昨年の
三月順子ちゃんと二人で學藝會に綴方をよん
だ。けれども順子ちゃんはもう遠く栃木縣へ行
つてしまつた。手紙のやり取りも口頭で何つ
んと切れてしまつていくらく手紙を出してもか
へつて来る。どうしたのらうか。けれど今日
だけけたとへごんを遠い所でもきつとく
私の心を思ひ出してくれるでせうと心にちか
つてあの樂しかつた日と思ひ浮かべた。
順子さんは正しい事が好きで愉快な性質だつ
たのでみんなに好かれた。あんなに人がな
ぜいつまでも居てくれないか。つたらうし手紙に
は又こちらに來度いとあつた。ぞい悲しい事
な人がすてませうといつても手紙の終りには面
白い事が書いてあつた。私の大好きな順子さ
んがいつかお便りが来るのを楽しみに待つ
てゐる。

高 一 綴 方

潮 干 好 浅 沼 庫 雄

ボクは、この氣持のよい音をたて
船は、沖へ向つて、風を、しが
し、港の外は、少し波が立つて、船先
にあたつて、くだけ散る。
先づ、西島附近の島々の向を、
し、縫つて、歩いた。面白く形をして、
皆、石灰分が、さうだ。南島は、その中
でも、最も、大きい。港の中に入つた。
もう、先客が、あつて、大さの、釣つ
てゐた。

天の鼻のヨメを、はがして見た。山本
さんは、タコを取つて、よろこんでゐる。
大村を、思ふ、した、船で、く、飯の味は、亦
特別である。友達でも、つれづれ、よかつた

かと考へた。

弟 浅沼俊

私は、弟が、います、年は、四ツです。
何か、ほしい、時、は、ま、せ、じ、を、い、つ、て、
な、れ、と、よ、び、ま、す。どう、し、た、か、の、向、お、腹
を、悪、く、し、て、病、氣、に、な、り、ま、し、た。お、醫
者、様、は、毎、日、見、に、こ、ら、れ、ま、し、た。
或、は、學、校、か、う、歸、つ、て、見、る、と、家、の
中、が、非、常、に、忙、し、い、に、働、い、て、お、ま
した、と、う、し、た、事、が、お、思、つ、て、お、弟、が、病
氣、の、た、め、に、何、も、な、さ、な、か、つ、た、の、で、ヒ、キ、ッ
キ、と、死、に、な、つ、た、ん、だ、と、う、で、す。
その、弟、は、今、は、も、う、さ、つ、か、り、元、氣、に、な、つ、て
姉、々、と、呼、び、ま、す。私、は、こ、の、弟、が、大
好、で、す。

友を失ふ 田代美穂子

私達の學級から一人内地の方に
いってしまいました。その人は重田弥生
さんです。私達は約七年間一諸に
勉強し遊んだ方です。

私は船まで見送りました。出帆
の際にはなつて見送る人々の歸
のうせうドラがなつた。お別れ
のうせうドラがなつた。お別れ
のうせうドラがなつた。お別れ
のうせうドラがなつた。お別れ

と通船にありた。
ボツボツと船が本船を離れる時
重田さんは悲そうにさびしうな顔
をしてゐた。私は眼に涙がぱりたまつ
た。五十嵐先生がそばにゐるので泣
かなかつた。
今夜の夜を書きたるが少重田さんの事
を考へると一人で涙が出て来ます。

夜廻

金子虎雄

いふ下腹がぶつかゆて眼が覺めた。
便所に行こうと思つて戸を明けると向
いの方に人が居るやうに見えた。
なんぞか背中がゾクとした。やつとす
で小便を定して床に入つた。
突然股の間に猫が入つて来た。今
頃は二時位か三時位かおぼろしく
ちよと時向いの方から拍子木の音
がきこえて来た。こんな事は夜
廻する人にはどんなにけい事だらうな
そんな事を考へて居るうちにつ
間にかおつてしまつた。

學校では、児童に物を大切にせよといふ精神の涵養を以て先週來
のやうな成績でありますから御家庭の御参考に供いたします。

持物に記名なき者の調

児童数	雑記帳	教科書	靴下履	男子服	帽子	手拭	ハンカチ	原簿教	手拭	運賃簿	帽子	児童
五六	七	三七	四	一八	一八	三	四	一	一	一	一	一
六三	九	二六	二	四七	三七	一	一	一	一	一	一	一
六〇	一七	四	二四	二四	一〇	一	一	一	一	一	一	一
五八	一〇	二七	八	二四	一〇	一	一	一	一	一	一	一
五五	三〇	三〇	七	三六	二二	一	一	一	一	一	一	一
四六	一〇	二〇	三	三二	一四	一	一	一	一	一	一	一
四六	三〇	三六	一八	三〇	一八	一	一	一	一	一	一	一
三六	一	一九	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

備考
教科書雑記帳、全部記名ナキモノハ印、一部分モノハ印
名頭字又ハ家ノ印等ハ記名ノモトス

なごごし 第百八十九號 昭十四年三月発行

明治天皇御製衣

てるにつけくもるにつけて思ふかな

我民ぐさめ上げいかにと

大村高等小學校なごごし編輯部